

交 流

孤独な旅人の絆

水上 勉『越前竹人形』にみる人間像

広島文化学園大学
深川 賢 郎

■ 作品の梗概

氏家喜助は、母親を知らない。三歳のときに死別した。父喜左衛門は、後妻をもらわなかった。喜助が21歳のとき、喜左衛門は65歳で亡くなった。竹細工一筋の職人だった。喜助は、父に似て小柄で、一徹なところがあった。父の死後、村人は背の低い父を嘲けるようにささやいていた。「喜助は父の死によって、村人の嘲笑が自分に代替わりしてきたような気がした」。喜助の劣等感はいっそう強くなり、無口で内にこもる職人となった。「喜助はまだ女を知らなかった」。「父に先立った薄倅な母親の、哀れな死を聞かされるたびに、喜助は、自分には、温かい母親の情にふれる機会は生涯なかったという悲しみが走った。そのためか」女に出会うと「とまどいを感じて、かたくなになった」。

父が死んで何ヶ月か経った。雪の降る日、突然、一人の女が墓参りに来た。喜左衛門の世話になっていたという。女は、芸妓で名を「玉枝」という。美しい女だった。

隣家の与兵衛は、玉枝のことを「おしまはんにそっくりやった」という。「喜助は絶句した。〈玉枝はんがお母はんに似ている〉。父が玉枝に魅かれた理由がはっきりした」。

後日、喜助は玉枝のいる「花見屋」を訪ね、その部屋で父の作った花魁（おいらん）の竹人形を見た。これまで喜助の見たこともない、みごとな竹細工だった。

「喜助は玉枝に魅かれた」。やがて、玉枝に身をひかせ、竹神の村に嫁として迎えることになった。しかし、玉枝を迎えた喜助は、努力しても床を同じくすることはできなかった。喜助は、「お母はんみたいに好きになったんどす」といいながら、竹人形の制作に打ち込むのだった。

喜助の作る人形が評判となり、京都や大阪の商人と取引がはじまった。そんな時、京の老舗「兼徳」から人形の仕入れにきた番頭、崎山忠平は玉枝が芸妓時代のなじみ客であった。喜助と夫婦の契りが持っていない玉枝は忠平の要求を拒みきれなかった。一度の過ちに玉枝は身ごもった。

喜助が忠平との過ちを知ったら、いまの幸せはなくなってしまふ。玉枝は忠平の力を借りて墮胎するため、集金という名目で京都に行った。しかし、当時、墮胎は厳罰であった。玉枝は再びだまされ、忠平は「たける情欲にまかせて」玉枝を犯した。やむなく、玉枝は叔母を訪ねるために、船に乗って遊郭のある中書島へ渡る。その途中で、玉枝は流産をした。列車の長旅と忠平の乱暴のせいである。未熟児は、船頭のはからいで宇治川の流れに沈められた。

竹神村に帰った玉枝は、母親のように喜助を助けた。喜助の作る竹人形は、大評判となった。幸せの絶頂にあって、玉枝は結核に倒れた。その死後、喜助は人形作りをびたりと辞めた。そして数年後、玉枝の後を追うように、喜助は首をつって死んだ。

■ 喜助と玉枝と船頭

喜左衛門は、実直な職人で、妻の死後芸妓の玉枝を愛した。玉枝が立派な花魁になることを夢見ていたのである。しかし、息子の喜助のために芸妓を妻にすることはできなかった。また、喜左衛門は玉枝の中に妻の「おしま」を見ていたのであろう。玉枝は「おしま」に瓜二つだった。

死ぬ間際に、喜左衛門は喜助に竹細工の要諦を伝授し、成仏した。彼の玉枝に対する情愛が、玉枝を竹神に呼び寄せた。そして喜助との出会いを作ったのである。玉枝は、複雑な生い立ちの中で、芸妓に身を落としていた。喜左衛門に出会ったことは、地獄で仏に出会ったような存在であった。だから、雪の中をはるばる墓参りに来たのである。

喜助は、玉枝をみたとき、美しい女性として親愛の情を抱いた。思案の末、妻として家には迎えたが、玉枝を女として抱くことができなかった。母親として慕いながら、一方では異性としてあこがれた。分裂する苦しみは竹人形に託され、作品として結晶となった。竹人形は、まぎれもなく妻の玉枝をかたどったものだ。喜助の愛は、異性としての玉枝を人形という性を超えた崇高な存在に転化していった。

それは、喜助の律儀な道德心と小男としてのコンプレックス、さらに内気な性格にがんじがらめにされた性情によると考えられる。その固陋な性情は、研ぎ澄まされ、芸術品としての越前竹人形を生んだ。人々の称賛と羨望の眼を独り占めにした竹人形は、単なる商品ではない。喜助の、母親に対する魂と妻の玉枝に向けられた情愛の結晶である。孤独な喜助と孤独な玉枝、二人がいくら求めても手に入れることのできなかった世界が越前竹人形となって結実した。

■ 運命の架け橋

玉枝は一度の過ちから妊娠した。法律の壁は、玉枝の墮胎を阻んでいる。「このままでは竹神に戻れない。喜助を悲しませるわけにはいかない」。玉枝の苦悩は万策尽きて、行き場を失った。厚い壁の前で立ちすくんだ玉枝を救ったもの、それは、流産という偶然のできごとである。それを助けたのは、老いた船頭であった。

〈中書島へ渡る女は、芸妓に違いない。この女は、身ごもった体で苦しんでいる。墮胎は法律で厳しく禁じられているのだ〉。船頭はそんな様子を玉枝から読み取った。船頭が船を漕ぎだした時、玉枝は、船中で流産してしまう。船頭はその処置をひそかに済ませ、未熟児は深くて速い宇治川の流れの中に沈められていた。無言のまま玉枝を運命の難所から救ったのである。

後に玉枝が臨終のとき、「京……宇治……」と呟いた。このとき玉枝は宇治の船頭を思い浮かべたのである。此岸（現世）から彼岸（来世）へ、船をあやつったのはこの船頭であった。玉枝は、この船頭に二度救われた。

かつて、私は『運命は、努力した者に、「偶然」という橋を架ける』ということばに出会ったことがある。玉枝は、三度の架け橋を渡った。一つは、喜助と出会って芸妓の生活から抜け出したこと。二つ目は、喜助との離別まで思いつめた玉枝が、船頭に救われたこと。三つ目は、臨終のときもう一度その船頭に導かれたことである。その導きによって玉枝は、冥界に渡った。三つのかけ橋の背後に、私は喜左衛門の無言の絆を感じるのである。

■ 美しい妻にひるむ喜助

ここで、喜助が玉枝との夫婦生活を成就できなかった問題を考えてみたい。喜助が玉枝を拒む理由について詳しく述べている部分は、次のように表現されている。

『わいは、玉枝はんの軀にさわるのんが恐ろしいのんや』

『玉枝はん、あんたはわいのお母はんや、わいはそない思うて、今日まで暮らしてきたんやがな。あんたの軀にさわると、わいはお母はんに抱いてもらうような気イがするのどす。わいは、あんたを抱きたいと思うと軀がしなえてくるのどす。堪忍してくれやす』(p.211)

この部分を読むと、喜助は玉枝を妻として、女として受け入れようとしている。しかし、彼の意に反してそれが出来ないのである。その障害はどこから生じているのだろうか。

谷崎潤一郎は、『越前竹人形』について次のような所感を残している。

「第九章で、京都の美術商の鮫島が訪ねて来て、竹藪の中で玉枝に出遇うところは圧巻である。「家内でござります」と喜助はひくい声で鮫島に紹介した。鮫島は、(中略)瞬間息をのんだ。美貌だったからである。すらりと背の高い玉枝は、肉付きのいい固太りの軀をしていた。白い肌が、青みどりの竹の林を背景にして、ぬけ出てきたようにみえる。それに切れ長の心もちつり上がった眼は、妖しい光をたたえて鮫島をみつめていた。

〈この男に、こんな美しい妻がいたのか……〉

鮫島はわれを忘れてみとれた。あいさつの声もでなかった。櫛の歯のように生えている竹林にさし込んである陽は、苔のはえた地面に雨のようにそそぐかにみえた。玉枝は黄金色の光りの糸を背にして、竹の精のように佇んでいた』(p.193)

鮫島ではないが、私もここで思わず息を飲んだ。「竹の精」という想像はいかにも美しい。この一言でその場の光景が金色を放って目に浮かぶ。(中略)美人と云っても大凡そ知れているような気がしたが、なるほどそう云う光線を浴びて竹の林に囲まれてすっと立っていたとしたら、さぞその美貌が不思議な円光のなかに輝いたことであろう」(中略)「玉枝を竹の精に喩えてあるせいか、何の関係もない竹取物語の世界までが連想に浮かんでくるのである」(『毎日新聞』63・9・12～14初出)

耽美派の谷崎潤一郎が、言葉を極めて玉枝の美貌を読みとっている。竹林の中から生まれ出たイメージの玉枝、それはかぐや姫のように現実から遊離した美しさである。玉枝の美貌は、喜助にとって神格化された天女にも匹敵する姿なのである。

いまだ女性に触れたことのない喜助は、村人から「玉枝はんは母はんにそっくり」という言葉で染め上げられ、美貌と献身とをもって自分に近付いてくる玉枝は、もはや単なる妻ではありえない。だから「わいは、あんたを抱きたいと思うと軀がしなえてくるのんどす。堪忍してくれやす」となるのである。

臨床心理学者の河合隼雄は、「内なる異性」について、ユングの唱える四つの段階を述べている。その第四段階について、「日本人にいちばんわかりやすいのは、弥勒菩薩などでしょう。女性だけど、女性でないようになってきているでしょう。だから、単にお母さんというのでもなし、乙女というのでもない。お母さんも乙女も全部超越して、この世の叡智をすべて持っているような女性」(『心の扉を開く』岩波書店 p.137) という意味なのである。

現代の若者のセックスレスについて、河合隼雄はつぎのような説明をしている。ある新婚夫婦が性的に結ばれなかった状況について、「見合いをした相手がたまたま美人であったため、彼にとっては今までに体験したことのない、女性に対するいたわりややさしさの感情が生じてきた」「新婚旅行のときに、彼の気持はもちろんうれしさで一杯であったが、彼の気付かないところで、彼の心とからだは乖離現象を起こしてしまい、彼が焦れば焦るほど、性関係をもつことはできなかった。人間の性というものは意思の力だけでは何ともならないところに不思議さがある」「性関係は、それが次元が高まるほど、多くのパラドックスを内包させながら成立するものである」(『大人になることのむずかしさ・青年期の問題』岩波書店 p.94) と説明している。

こうした臨床心理学の知見に学ぶのも一つの方法であるが、『越前竹人形』の著者が、どういう母性観を持っているのか、についても究明してみる必要があるだろう。

■ 水上勉の母親観

山田太一編『生きる悲しみ』(ちくま文庫)に水上勉の「親子の絆についての断想」という一文が収録されている。

この一節に「他郷にある子は、親とむすばれていたヒモをひきずって、遠くはなれてくらす」という一文がある。水上は、棺桶を作る父と下駄の鼻緒を売ってわずかの金をもうけていた母の間に生まれた。この夫婦には、貧乏と夫婦げんかが付いて回る。家には電燈も風呂もない。家族の夕餉の団欒もない。

借金取りが来れば五人の子供を連れて、母は山に逃げるのである。母は、父から陰湿に苦しめられて、子どもの眼を隠れて泣いた。しくしく泣くのである。……

これが、口減らしのために「私」(水上)が「京都の寺へゆくまでの、両親におぼえた絶望に近い反抗心の概要である」と述べている。「だが、この貧困な家庭と親の思い出は私には忘れられないのである。ケシゴムで都合よく消しもできぬ、暦の根に、固い雪として凍りついている。このことが、いま私にとって重要である。貧困をのろっていた頃は、よその家と比べて、イヤだった両親でありわが家だが、なつかしいというよりも、いま不思議に光りのようなものを放って私をとらえるのだ」(p.196)

その後、水上は、デンマークのアンデルセンの在所を訪問している。アンデルセンは、貧困家庭に生まれ、父は靴直し職人、母は洗濯女のアルコール中毒患者であった。14歳でオーデンセの街から出郷し、二度とこの街に帰らなかった。「あれほど母を憶う人魚や、マッチ売りの娘や、あひるの子を書いておきながら」(p.206)、施設で死亡した母のもとに帰らなかった。

「だが、宿で(水上が)考えたことは、14歳で(郷里を)出たアンデルセンが、イヤだと思った隣人や、母や第二の父との絆をその後いかに大切に抱き直して旅したかということだった。71で死亡するまで、帰らなかったということの内面についてであった。彼の数多い童話の根底に流れるものは、少年時の原体験にさかのぼっての空想と夢であったと気付いた。

おさな児のたよりない身を、あなたの手に抱いて、
わたしの唇に〈神さま〉とつぶやくことを教えてくださいました。
わたしはあなたの胸から命と愛情をすい
あなたはわたしに主のみ心を知ることを教えました。
ああ、わたしは永久にあの方の恵みと、
信心ぶかい母から教わったことをわすれません。

(アンデルセン「わたしの母に」1833年作)」(p.207・208)

アンデルセンは、苦しい旅の中にあって、自分に命を授けてくれた人、自分に愛を教えてくれた人を知ったのである。信仰や神への畏敬の念を教えてくれたのも母であることを知った。

水上は、生まれて九年という短い年月ではあったが、自分も「辛苦にみちた暦に愛憎をふかめ、その人々と離れることによって、抱き直し、佇みして親の放つ光を心奥に受けとらえた」人間であることを気付いた。「そうしたかなしみを根雪にして」自らの芸境を切りひらいたのである。水上の母親像は、崇高な尊敬と感謝の象徴として認識されている。遠く離れていればいるほど、人間の絆は強くなるという。彼を支えている愛と作家としての精神活動は、この苦しんだ母の生き方を根雪にしている、という自覚である。喜助の母親は、竹林に肥料を運びながら、貧困のなかで斃れた。喜助は玉枝の向こうに母を見ている。水上も玉枝の向こうに自分の母を見ているのである。心の深いところで、喜助が玉枝を「竹の精」ととらえ、弥勒菩薩やかぐや姫と受け止めても、水上にとっては何の矛盾も生じない。

ただ、次の一言を付け加えておかなければならない。水上文学の原風景は、「人間はすべて、生まれたときから、単独旅行者だという思いに他ならぬ」(p.215)という一文である。絶対的な孤独観のなかに彼が生きていることも忘れてはならないであろう。

■ むすび

水上文学を受け止めるためには、子ども時代に抱いた親に対する極貧のなかの生活とその苦悩を抜きにできない。子ども時代に憎んだ母の貧しい懐は、歳とともに変貌し、「私の命と愛の心」をはぐくんでくれた慈愛の温床へと変化していく。離れれば離れるほど、孤独な愛の絆は強くなるというパラドクスの中に、アンデルセンも水上も大きな救いを汲み取っているのである。ここに彼らの苦悩から生み出された共通の芸境がある。

『越前竹人形』からは、灰色のモノトーンのなかに、あたたかい温もりが伝わってくる。これは、登場

人物の孤独の魂のそれぞれの美しさと、そこから匂いたつ情愛によるものであろう。孤独のなかに輝く愛の絆は、貧困の中にさすらう魂に対する嫌悪、と同時に親子の魂の別離が遠くなればなるほど呼びあう愛の強烈な絆である。水上文学のぬくもりと魅力は、この反発する嫌悪と引き合う愛のアンビバレンスから生まれる精華であることを注目したい。

資 料

- 水上勉『雁の寺・越前竹人形』新潮文庫（平成20・4）
谷崎潤一郎「越前竹人形」を読む 毎日新聞（1963.9. 12～14）
河合隼雄『心の扉を開く』岩波書店（2006.3）
河合隼雄『大人になることのむずかしさ』岩波書店（2008.5）
山田太一編『生きる悲しみ』ちくま文庫（2005.11）